

報倫理教育によって、メディアの悪用が減ることが期待される。これらの教育が実際に効果を持てば、メディアに対する規制を少なくすることができる。

今後は、これらの教育を効果的に行うための方法の開発や、それに関する研究および実践が大いに進められるべきである。これに成功することが、メディアの光をますます輝かせるものとなるのである。

参考文献

- (1) 坂元 章 (2000) 21世紀はテレビゲーミング社会——娯楽主導から有効利用へ——シミュレーション&ゲーミング, 10(1), 4-13.
- (2) 坂元 章 (編) (2000) インターネットの心理学——教育・臨床・組織における利用のために——学文社 全181頁

討論のまとめ

大谷 尚 (名古屋大学)

公開シンポジウムでは、前半に4名のシンポジアストからの上記のような提案を受け、休憩時間にフロアからの質問を集めた。その中からできるだけ4氏に共通し、討論の題材とすべき内容をもつ次のような質問を司会が選び、紹介した。「メディアを批判的に読み解くために、読み解き方を教えるは主体的な読み解きができなくなる。主体的・批判的な読み解きのための教育はそもそも可能なのか？ 可能ならそこでの教師あるいは大人の役割は何か？」「メディア・リテラシーは外国では独立した教科なのか、国語や社会のような教科に含まれるのか？ また日本ではどうすべきか？」「提案にあったように、インターネットなどのメディアは良い面と悪い面の両方を同時に持つ。これはこのメディアの本質であって不可分であり、良い面だけ教育に利用することは不可能なのではないか？」

各シンポジアストには、それらへの回答を求めた上で、他のシンポジアストの提案との関わりを考慮し、司会から次のような問題を投げかけ、それにも答えて頂くことで討論を進めた。坂元氏には、「インターネット等について規制は困難であるうえ望ましくないので、教育をすべきだ」との提

案に対して、その課題のために示唆になるような社会心理学的な知見の紹介を求めた。内田氏には、坂元氏の「規制をせず教育を」という提案に対して、学校現場での現実を背景とした反論などはないか、むしろ教育は困難であって規制を必要とするような現実はないかと問いかけた。生田氏には、提案の中でのメディア行動についての60, 70, 90年代の3回の結果の違いをふまえて、これからの教育の在り方についての提案を求めた。今津氏には、メディアをめぐる概念の混乱をふまえてその再整理・再定義をお願いするとともに、氏が自身の実践で問題につきあつた現在の子どもの実態との関わりで、メディア・リテラシー教育についての提案を求めた。四氏からの回答と再提案は以下のとおりだった。

・坂元氏：メディアの良い側面と悪い側面を切り分ける研究こそが必要。具体的には、メディアのどういう側面をどう使えばどういう人にどういう効果があるかを解明する。たとえばインターネットが社会的な不適応を起こすのは、一般的なサンプルでの結論であり、とくにチャットがよくないとされている。それに対し、もともと不適応なクライアントに臨床の目的で使用して成功している。このように、サンプル、状況、使い方の違いを切り分けていく研究が必要である。また、テレビの研究などで、大人と一緒に視聴しながら「この部分はリアルでない」とか「これはこう理解すべきだ」というようなコメントをすることで、暴力的な影響などを弱めることができることが知られている。このように大人の役割は重要であり、メディアからの影響を考えて大人がコミットしていく必要がある。なお新しいメディアについての教育は始まったばかりで、教材作りに苦労しており、確定的ではないがひとつだけアイデアを示せば、情報倫理やインターネットの問題は、自分の見えないところで起こる問題であるから、シミュレーションによる模擬社会ゲームをすることで、その影響の深刻さを学ばせられる可能性がある。

・内田氏：インターネット等による不適応の証拠は学校現場ではまだない。むしろ岡崎市の「心の教育ネットワーク」で有効に活用されている。不登校で教室に入れず保健室登校をする子にインターネットを使用させたら、その中のひとりが校長先生に（同じ校内だが）メールを送った。校長も返事を送ってやりとりが始まり、その子はやが

て校長先生に会って話してみたいと思うようになり、心のつながりをもてるようになって心を開いた事例がある。また、パソコンに心が向きすぎた子がいて、小学校では阻害されていたが、中学校では生徒の中でのヘルプデスク的役割を果たすようになり、学級内での位置と自信を得て生き生きとした。その子の小学校の時の教頭が研究授業で様子を見て涙を流し、パソコンを学んできたことがあの子を救ったと喜んだ。パソコンは必ずしもパーソナルなものではなく、子どもどうしのコミュニケーションのきっかけとしてこのように暖かく活用される場面をたくさん見ている。なおメディアを主体的、批判的に読み解くために、新聞の裏側、テレビの裏側、たとえば新聞の記者室の話や自分の受けた取材の話をしている。取材には「意図」があり、報道は人の意図で行われていることを、事例を紹介しながら教え、多面的にもものを見る目を大事にさせようとしている。なお学校では、先端メディアだからなんでもやってみるという考えが教師にも子どもにもある。しかし子どもの個人的な手紙を学校の切手を使って出さないというふうに、既存のメディアと照らし合わせ、学級経営を含めて使用について考えていくことが情報倫理の教育では必要であり、メディアを全人的な教育のなかで捉えていく必要がある。

・生田氏：かつて映像メディアの代表であるテレビについて、現実からの逃避機能が問題視されていた。しかし 70 年代にゲーム機が登場し、その機能がゲーム機に奪われ、90 年代の新しいゲーム機の時代にも同様である。いずれにせよ逃避の背後にある現実社会のなかでの矛盾から、空想世界であるゲームの中に逃げている。映像メディアにはマンガも含めて、そういう流れがあることがうかがわれる。新聞は、それに対して固い真面目なメディアだったが、その機能はインターネットにかわっていっくだろう。NIE (Newspaper in Education) が新聞社の危機感から行われているが、危機感は現実になっていっくだろう。携帯電話も動いており、また新たな方向が出てくるだろう。それに対して読書に対する態度と、人に対するものすなわち対人コミュニケーションはそれほど大きく変わらない。発達段階で見れば、映像メディアから活字メディアにかかわっていくメディア行動の転換期というものがあり、転換期のない子どもたちが様々な問題行動を起こすといわれていた。しかし 70 年

代から、全体として転換期がほとんどおきていない。それが受験競争のような状況によるのか読書離れによるのかかわからないが、今も回復されていない。批判的な視点の育成は大変難しい課題だが、やはり自分で映像を作っていくことが必要。三角錐が視点によって円にも三角形にも見えるように、どこにどうカメラをおいたら何が見えてくるのか、どの視点で事実の何が切り取れるのかを学ぶ。その中から、目の前に展開される映像を鵜呑みにしない能力が獲得できるのではないか。

・今津氏：(氏による概念の整理の後で。) 批判的な視点については、映像メディアの映像はあくまで人為的に構成されたものであることをしっかり知ることが必要。その際に結論を教えることは適切でないが、分析の視点を与えることは差し支えない。附属での自分の実践についても反省しているが、制作させる前に、まずその構成を捉える分析のトレーニングが必要。たとえば生徒たちにテレビコマーシャルを示し、その中での男性と女性の描かれ方、どういう家の暮らしが舞台でどういう登場人物のどういう生活状況か、問題と感ずる描き方はないか等を考えさせ議論させる。こういう「視点」を提示する。また総合的な学習の一環としてメディア・リテラシーの授業が少しずつ始まっているが、欧米ではこれは国語(つまり英語圏では英語)の中に位置づけられているケースが多い。文字という記号と同時に、映像という記号について、国語(英語)のなかできちんと取り扱うということが必要だという認識にもとづいている。

このように、討論はメディア・リテラシー教育のあり方に集中した。そこで司会から、学校と家庭と社会における役割分担はどうかと問いかけた。それに対して生田氏から、「高校生の母親が、子どものインターネットと携帯電話のために自分のパートによる収入を越えるお金が毎月引き落とされているが、何が起きているか親には理解ができず、学校でも把握していないと訴えている」という状況が紹介され、親のメディア・リテラシーの必要と、学校教育では、抽象的なことでなく現実におきていることをリアルに取り上げていく必要が指摘された。

これを受けて最後に司会が、プリペイドカード等の事例で、現代ではお金が情報になっていると同時に、携帯電話やインターネットで情報を得る

事例から、お金で購入するものも情報になっていることを指摘した上で、授業中に携帯電話を使用してオークションに参加する高校生の事例を紹介し、今日のメディアでは大人が理解できないような状況が簡単に生まれることを指摘し、従来のメディアに関する概念を大幅に拡大する必要とその教育の必要性、そしてそれらは、子どもどうしの関係、教師との信頼関係、親と子の会話の中で、新たな概念を共有するものでなければ、今後のメディアの発展に対応できないことを指摘した。なお、この問題によって、教育における新たな問題

を解決する力が教育学にあるかどうか問われており、その意味でも発展的に取り組まなければならないとしめくられた。

このように、本シンポジウムの課題は、議論のなかで全体として今後のメディア・リテラシー教育の問題として捉えられ、その方向性と具体的なあり方への議論へと集約していった。そこでは、過去の研究成果、心理学からの示唆、外国の研究事例や実践事例の紹介、動向と歴史、また学校現場での事例の紹介がなされ、今後の発展のために有益であったと評価できる